

## 児童生徒一人一人が安心して過ごすための居場所づくりはいかにあるべきか —楽しい学校、学級をつくる教職員の在り方を通して—

### 《研究の概要》

本研究は、年々不登校児童生徒の人数が増えていく中、児童生徒が安心して過ごすための居場所を学校に作っていくために教職員はどのようなことに留意すべきかを探ったものである。具体的には、子供が今、学校生活の中でどのような時間や場所に楽しんでいるかを調べ、教職員の認識とクロスして分析した。その結果、学年が進むにつれて、児童生徒の考えは多様化していき、これに伴って教職員との認識のずれも様々な場面で生じていることがわかった。それゆえ教職員は、この認識のずれが存在することを十分理解したうえで適切な対応を進めていくことが必要であることが明らかになった。

### 1 問題の所在

近年、我が国では、不登校、いじめ、子供の自殺などの諸課題が深刻化している。特に不登校については「令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（文部科学省 2024）によると、小中学校で約 34 万 6 千人となり、11 年連続で増加しており、過去最多となっている。本市でも同様の傾向があり、不登校児童生徒の人数は、小・中学校ともに増加している。

「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策『COCOLO プラン』（文部科学省 2023）では、不登校により学びにアクセスできない児童生徒をゼロにすることを目指し、①不登校の児童生徒全ての学びの場を確保し、学びたいと思った時に学べる環境を整える、②心の小さな SOS を逃さず、「チーム学校」で支援する、③学校風土の「見える化」を通じて、学校を「みんなが安心して学べる」場所にする、の 3 点を重点としている。本市に照らして考えると、①に関しては、市内 6 区の全ライトポートにおいて小学校専用の教室を開設するなど機能の拡充を行い、全ての不登校児童生徒が、学びたいと思ったときに学べるように環境を整えている。②に関しては、令和 5 年度アセスメントを基にした支援や校内体制づくりについての研究に取り組み、その成果を市内に発信してきた。しかしながら、③に関してはまだ十分な対応がなされているとは言えない。

「不登校の要因分析に関する調査研究報告書」（文部

科学省 2024）によると、不登校の要因について「いじめ被害」「教職員とのトラブル」「心身や生活リズムの不調」等に関する項目において、教職員と児童生徒や保護者の認識のずれが大きいことが明らかになっている。このことから、教職員と児童生徒の認識のずれをなくしていくことが、学校、学級が「安心して過ごせる場所」になり、不登校を減少させていくことにつながるのではないかと考えた。

そのために、実際どのような場面で認識のずれが生じているのかを示し、よりよい対応をできるようにするため、本研究を進めていく。

### 2 研究の目的と方法

#### (1) 研究の目的

「安心して過ごせる居場所づくり」を「楽しい学校、学級づくり」として捉え、現在の児童生徒と教職員が「楽しい学校、学級」についてどのように考えているかを調査し、教職員との認識のずれの有無を分析する。

#### (2) 研究の方法

質問法により、児童生徒、教職員に対し、以下のとおり調査を実施し、クロス分析を行う。

##### ①児童生徒 ※研究協力員所属校（n=2, 715）

・「学校生活のどのような時間や場面に楽しんでいるのか」

##### ②教職員（n=125）

・「児童生徒は、学校生活のどのような時間や場面に楽しんでいると思うか」

### 3 研究内容

#### (1) 児童生徒、教職員への調査（「楽しい学校、学級アンケート」）の内容について

研究協力員の所属学校の児童生徒、教職員に向けて、児童生徒が「学校生活のどのような時間や場面に楽しさを感じているのか」について調査を実施した。

学校生活を大きく六つの時間や場面（〔資料1〕）に分け、調査した。また、それぞれの質問は、5件法で回答を求めた。

- |                         |
|-------------------------|
| ①朝の時間（登校、朝の会、朝学習の時間等）   |
| ②授業の時間（話し合い、発表、グループ活動等） |
| ③休み時間（授業間の休み、業間、昼休み等）   |
| ④特別活動の時間（給食、掃除、係活動等）    |
| ⑤行事の時間（運動会、校外学習、遠足等）    |
| ⑥帰りの時間（帰りの会、下校）         |

〔資料1〕 学校生活の六つの時間や場面

次に、児童生徒には、「あなたが、学校で生活する中で、こうだったら、もっと楽しくなるな、行きたいなど思うことがあれば、教えてください」という質問を設け、自由記述で回答を求めた。

教職員に対しても、「子供たちが変わったところ」「困っていることや悩んでいること」「工夫していることや心がけていること」などを調査した。

#### (2) 調査結果（児童生徒）

##### ①楽しみにしている時間や場面

学校生活の時間や場面で、「とても楽しみにしている」「楽しみにしている」といった肯定的な回答割合の合計が80%以上かつ、「あまり楽しみにしていない」「全く楽しみにしていない」といった否定的な回答割合の合計が10%未満の時間や場면을、「楽しみにしている時間や場面」とした。

〔表1〕より、児童生徒が「楽しみにしている時間や場面」の多くが、行事や休み時間であることがわかった。特に「宿泊学習のとき」「校外学習のとき」は、約90%の児童生徒が「楽しみにしている」と回答している。また、休み時間については、一人で過ごすことより、友達やクラスメイトと関わることを「楽しみにしている」ことが、明らかになった。

〔表1〕の中で、授業の時間の中で、特に「楽しみにし

ている」の回答割合が高かったのは「友達やクラスメイトと話し合っているとき」である。授業において、一人で学習するのではなく、他者と関わりながら学ぶことに楽しさを感じている児童生徒が多いことがわかった。

〔表1〕 児童生徒が楽しみにしている時間や場面

学校生活の時間や場面	
行事	宿泊学習（移動教室、農山村留学、自然教室、修学旅行等）
行事	校外学習
行事	遠足
行事	(小) 運動会、スポーツフェスタ (中) 体育祭
休み時間	休み時間（業間休み、昼休み）
休み時間	友達やクラスメイトと室内で遊ぶ
休み時間	友達やクラスメイトと話す
授業	友達やクラスメイトと話し合っている

##### ②楽しみにしていない時間や場面

学校生活の時間や場面で、否定的回答の割合が、小学生は15%以上、中学生は20%以上の時間や場면을、「楽しみにしていない時間や場面」とした。

〔表2〕 児童生徒が楽しみにしていない時間や場面

学校生活の時間や場面		小学生 (%)	中学生 (%)
授業	(小) テストをしているとき (中) 定期テストのとき	16	54
授業	発表しているとき	23	37
特別活動	掃除のとき	20	24
朝の時間	朝の学習のとき	17	23

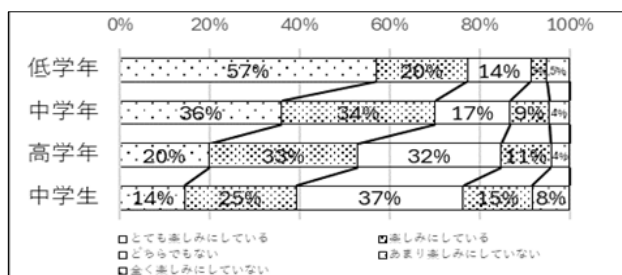
〔表2〕より、特に「テストをしているとき」は、中学生については、半数以上が否定的な回答をしており突出した割合の高さとなっている。小学校高学年の否定的な回答割合が21%であったのに対し、中学生が54%と倍増していた。

また、小学生の否定的な回答割合が一番高かった時間や場面は、「発表しているとき」だった。友達の前で発表することが恥ずかしい、間違えたらいやだ、自信がない等、様々な理由が考えられる。学年が上がるにつれて、「どちらでもない」の回答割合も増えていることから教科や発表する内容によって楽しみにしていたり、楽しみにしていなかったりするのではないかということが推察された。

##### ③学年が進むにつれて「楽しみにしている」の割合が大きく減少していく時間や場面

〔図1〕は、登校の時間の調査結果である。このように小学校低学年から中学生になるにつれて、「とても楽しみにしている」「楽しみにしている」といった肯定的な

#### 4 教育相談に関する研究



【図1】登校の時間についての調査結果

回答割合が大きく減少し、「楽しみにしていない」「全く楽しみにしていない」といった否定的な回答割合が増加している時間や場面があった。そのような項目を[表3]に示した。

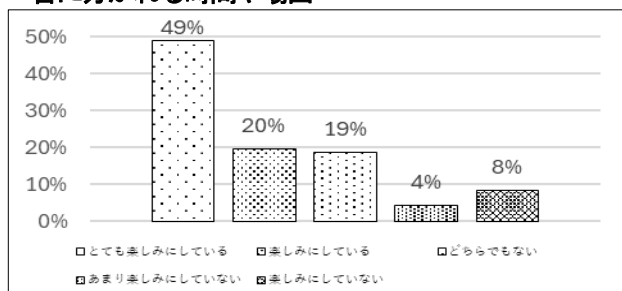
【表3】肯定的な回答割合が大きく減少し、否定的な回答割合が増加している時間や場面

	学校生活の時間や場面	肯定的な回答割合 (%)		肯定的な回答の減少割合 (%)
		低学年	中学生	
授業	テストをしているとき、定期テストのとき	73	22	51
朝の時間	朝の会するとき	73	31	42
授業	発表しているとき	66	26	40
授業	作品を見せ合うとき	81	43	38
朝の時間	登校しているとき	77	39	38
特別活動	係活動のとき	81	46	35
朝の時間	朝学習のとき	70	36	34
朝の時間	登校してから朝の時間	75	44	31

[表3]より、授業の時間や朝の時間の項目が多くなっていることがわかる。小学校低学年は、学校に行くことを毎朝楽しみにしている児童が多く、学年が進むにつれて、肯定的な回答をする児童生徒の割合が減少している。特に小学校1年生は、学校で初めて学ぶことも多く、毎日新鮮で、わくわくする気持ちで登校してくる児童が多いと予想できる。

特別活動の「係活動」は、低学年と中学生の肯定的な回答割合を見ると、35%も減少していることがわかる。同様に「委員会活動」の高学年と中学生の肯定的な回答割合も、28%減少している。

#### ④「楽しみにしている」と「楽しみにしていない」の回答に分かれる時間や場面



【図2】部活動の時間についての調査結果

中学校の部活動の時間の調査結果 ([図2]) のように肯定的な回答割合が高いが「全く楽しみにしていない」の回答割合が「あまり楽しみにしていない」よりも高い割合を示している。そのような項目を[表4]にまとめた。

【表4】「全く楽しみにしていない」の割合が、「あまり楽しみにしていない」よりも高い割合を示している時間や場面

	学校生活の時間や場面 (該当する学年)
授業	友達やクラスメイトに教えているとき (低・中・高学年)
休み時間	業間休み、昼休み (低・高学年、中学生)
休み時間	一人で静かに過ごすとき (低・中学年)
休み時間	友達やクラスメイトと話すとき (低・中・高学年、中学生)
休み時間	友達やクラスメイトと外で遊ぶとき (低・高学年、中学生)
休み時間	友達やクラスメイトと室内で遊ぶとき (中学年、中学生)
休み時間	先生、大人と遊ぶとき (低・中学年)
特別活動	部活動のとき (中学生)
帰りの時間	帰りの会するとき (低・中学年)
帰りの時間	下校しているとき (低・中学年)

[表4]からわかるように、児童生徒の回答が分かれる時間や場面は、休み時間が多い。特に「休み時間に友達やクラスメイトと話すと」は、全学年該当している。どの学年も肯定的な回答割合が、75~90%と高いが、「全く楽しみにしていない」と回答している児童生徒が10%近くいる学年もある。つまり、休み時間は、楽しみにしている児童生徒が多い反面、一緒に話をしたり、遊んだりする友達やクラスメイトがいなくて、辛い時間を過ごしている児童生徒も学級の中に一定数いるということが予想される。

次に、「帰りの会の時間」「下校している時間」に着目すると、どちらも小学校低学年、中学年が肯定的な回答と否定的な回答に分かれている。帰りの時間を「全く楽しみにしていない」ということは、学校が楽しくて帰りたくない、家に帰っても楽しくない等といった児童の思いがあるのではないかと推察される。

#### (3) 児童生徒が考える楽しい学校、学級 (自由記述)

小学校中学年・高学年、中学生に「あなたが、学校で生活する中で、こうだったら、もっと楽しくなるな、行きたいと思うことがあれば、教えてください」と質問したところ、前向きな意見があり、その中には共通点も多く見られた。

##### ①小学校中学年・高学年

小学校中学年・高学年の記述内容を大きく「学校生活

にすること」「学校行事に関すること」「生徒指導に関すること」「遊び、活動に関すること」の四つに分類した（[資料2]）。

学校生活に関すること	
◎休み時間を長くする。 ・楽しく学習できるようにする。 ・授業中の話合いの時間を増やす。 ・グループで活動する授業を増やす。 ・掃除をしっかりする。	・授業中静かにする。 ・宿題をなくす。 ・授業時間を減らす。
学校行事に関すること	
・宿泊学習の日数を増やす。 ・宿泊学習で県外に行く。 ・校外学習で様々な場所（ディズニーランド、USJ等）に行く。 ・季節に関するイベントをする。（餅つき、節分、夏祭り等）	
生徒指導に関すること	
・いじめや陰口がない思いやりの心のある学校にする。 ・みんなと仲良くする。（けんかをなくす、仲間はずれにしない等） ・きまりを守る。 ・協力して助け合う。	
遊び・活動に関すること	
◎全校で遊びたい。 ・全校で行う活動を増やしたい。 ◎他学年や他の学級との交流を増やす。 ・クラスレクを増やす。 ◎友達と交流する時間を増やす。 ・みんなが仲良くなれるイベントをする。	

※◎は、特に多かった記述

[資料2] 小学校・中学年・高学年の主な記述内容

[資料2]の小学校・中学年・高学年の児童の記述内容の中において「学校生活に関すること」で特に多かったものは、「休み時間を増やす」であった。児童にとって休み時間は友達と遊ぶことができる貴重な時間であり、楽しみにしている時間であることがわかる。また、授業に関することでは、楽しく学習ができるように、「話合いの時間やグループ活動を増やしてほしい」という意見も多く見られた。

「学校行事に関すること」では、特に高学年から宿泊学習の場所や日数について、校外学習の場所についての記述が多く見られた。宿泊学習や校外学習は、児童にとって楽しみな時間であることがよくわかる。

「生徒指導に関すること」では、児童は、いじめや悪口、けんかや仲間はずれのない学校を望んでいることがわかる。

四つの分類の中で最も記述が多かったのが「遊び・活動に関すること」である。「全校で遊びたい」や「他学年や他の学級と交流したい」等、学級の仲間だけでなく、他の学級や学年とのかかわりを強く求めていることがよくわかる。

## ②中学生

中学生も小学生と同様に、生徒の記述内容を大きく

「学校生活に関すること」「学校行事に関すること」、「生徒指導に関すること」「レクリエーション・交流に関すること」の四つに分類した（[資料3]）。

学校生活に関すること	
◎休み時間を長くする。 ◎授業で話し合ったり、みんなで考えたりする時間を増やす。 ◎授業や授業評価にゲーム性をもたせる。 ◎体育の時間、体を動かす時間を増やす。 ・宿題の量を減らす。（なくす） ・定期テストの教科を減らす。 ・部活動の時間を長くする。 ・部活動の時間を短くする。	
学校行事に関すること	
◎行事を増やす。（文化祭、球技大会、等） ◎修学旅行や校外学習の場所や回数に関すること。 ・行事のとき、時間に余裕をもって計画する。 ・合唱コンクール等の放課後練習を自由参加にする。	
生徒指導に関すること	
◎校則を少し緩くする。（服装、髪型、ヘアゴム等） ◎いじめがない学級にする。 ◎みんな楽しく、仲よく過ごす。 ◎友達やクラスメイトとの時間（話す、交流など）を増やす。 ・誰でも発言できる雰囲気をつくる。 ・みんなで挨拶をする。	
レクリエーション・交流に関すること	
◎学級、学年、全校でレクリエーションをする。 ◎全校で仲（絆）を深める機会をつくる。（増やす） ・もっとグループや学級で交流する時間を増やす。 ・イベントを開催し、様々な人と接する場を設ける。	

※◎は、特に多かった記述

[資料3] 中学生の主な記述内容

[資料3]の「学校生活に関すること」で、特に多かった記述も、「休み時間を増やす」であった。小学生は、理由として「遊ぶ時間を増やしてほしい」といった記述が多い反面、中学生は、日頃の多忙なスケジュールで疲れているためか「休憩する時間を増やしてほしい」という記述の方が多かった。

また、授業に関しては、小学生と同様、楽しい授業を求めており、ゲーム性のある授業や、話し合ったり、みんなで考えを出し合ったりする授業を求めていることがわかる。生徒が「楽しみにしていない」時間の一つ、定期テストに関しては、「実技教科等、テストの教科数を減らしてほしい」という意見が多かった。

部活動に関しては、「時間を長くしてほしい」と「時間を短くしてほしい」の両極端の意見が多数存在し、生徒によって意見が分かれる活動であることがわかる。

「学校行事に関すること」では、中学生は「行事を増やしてほしい」という意見が多かった。みんなと一緒に楽しみたいという気持ちとともに、行事を通して、たくさんの人と交流していきたいという記述が多く見られた。その反面、「合唱コンクールや長縄の放課後練習を

自由参加にする」といった意見も見逃せない。

「生徒指導に関すること」では、校則に関する記述が多かった。校則の意味を考え、その中で改善、提案をしている生徒も多くいた。

「レクリエーション・交流に関すること」では、小学生と同様に、「学級、学年、全校でレクリエーションをする」等、自分が所属している集団ではない場所にいる他者との交流を望んでいる意見が多く見られた。また同学年だけではなく、異学年間の関わりを求める意見も多かった。

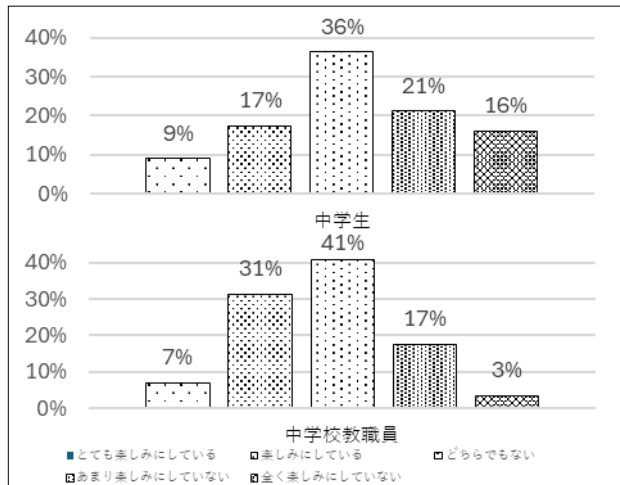
#### (4) 児童生徒と教職員との認識のずれについて

児童生徒と教職員の調査結果を比較すると、様々な時間や場面で、児童生徒と教職員との間に認識のずれが生じていることが明らかになった。

##### ①授業の時間における認識のずれ

特に、学校生活の中で多くの時間を占める授業の時間においては、認識のずれが多く見られる。

【図3】は、中学生と中学校の教職員の「発表しているとき」の調査結果をグラフに表したものである。



【図3】発表に対する生徒と教職員の認識

【表5】発表に対する生徒と教職員の肯定的な回答割合と否定的な回答割合

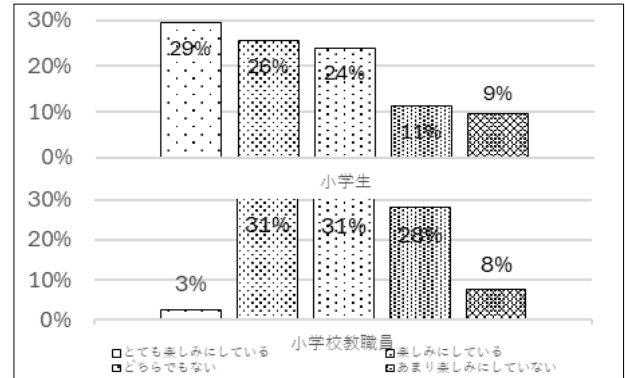
	肯定的な回答割合 (%)	否定的な回答割合 (%)
中学生	26	37
中学校教職員	38	20

【図3】、【表5】より、中学生の生徒は、発表することに関して、肯定的な回答割合が26%に対して教職員は38%、否定的な回答割合は、生徒37%に対して教職員は20%となっている。生徒と教職員の肯定的な回答割

合と否定的な回答割合が真逆になっており、認識のずれが生じているといえる。

##### ②掃除の時間における認識のずれ

【図4】は、小学生と小学校の教職員の「掃除のとき」の調査結果をグラフに表したものである。



【図4】掃除の時間における児童と教職員の認識

掃除をすることに関して、児童の肯定的な回答割合が55%に対し教職員は34%、否定的な回答割合は、児童20%に対し教職員36%であり、教職員が感じている以上に児童は、掃除を楽しみにしていることがわかる。

## 4 考察

### (1) 調査結果 (児童生徒) について

児童生徒の楽しみにしている時間や場面は、「行事の時間」や「休み時間」に多い。特に「行事の時間」は、児童生徒は日常では感じることのできない、「非日常」である。ただ、「非日常」を楽しむためには、日常を充実させる必要がある。つまり、学校生活の多くの時間を占める「授業の時間」の充実が、「楽しい学校、学級」につながるのではないかと考える。

「授業の時間」の中で、特に児童生徒が、楽しみしている場面は、「友達やクラスメイトと話し合うとき」である。また、自由記述に「他者との関わり」を求める記述が多いことから、他者との協力や話し合い等、関わりながら学習することを多く取り入れていくことが、楽しい学校、学級につながる一つの方策ではないかと考える。逆に児童生徒が、楽しみにしていない時間は、「テストをしているとき」である。これは同じテストでも、小学校の単元末テストと中学校の定期テストでは、児童生徒の抱くイメージが大きく異なってくるためと思

われる。つまり、テストの様式（市販のものか自作のものか等）や学習内容の質・量、テスト範囲等小学校と中学校では異なり、ギャップが増大していくことも要因に考えられる。しかし、テストが嫌いだから学校に行きたくないといった単線的な考えではなく、テストがあるけれど学校にはそれに勝る楽しさがある、学級には自分の果たしたい役割があるといった複線的な考え方で、嫌なことを乗り越えられるマインドを育てていくことも必要であると考えられる。

二極化とまではいかないが、肯定的な回答と否定的な回答に分かれる時間や場面も多くあった。この場合、多数意見だけに目を奪われることなく少数意見にも目を向け、なぜこのような意見になったのかといった要因を探ることで児童生徒にとってよりよい環境をつくるヒントが得られるかもしれない。

## (2) 児童生徒と教職員との認識のずれについて

調査結果から、児童生徒と教職員との認識のずれは様々な時間や場面に生じていることがわかった。特に授業場面やテストに対する認識のずれは注意すべきものがある。例えば、授業中の発表[表5]に関する児童生徒と教職員の意識にはかなりのずれがある。このことは児童生徒の授業に対するストレスにつながり、学校を遠ざける要因にもなりかねない懸念が内在する。また、小学校と中学校のテストの様相は、学校文化的な背景の違いもありかなり異なる。小学校から中学校へ進学した直後の生徒は、テストに対する認識のギャップが大きく、その拒否反応にうまく対応できないことも考えられる。

児童生徒と教職員との認識のずれは、児童生徒の発達段階を考えると多様化してくるのが当然であり、様々な場面で生じてくることは避けられない。ただ、ここで大切なことは、教職員が「認識のずれはある」という前提に立って児童生徒に対応していく姿勢である。

## 5 研究のまとめ

児童生徒が「学校生活のどのような時間や場面に楽しさを感じているのか」を調査分析することにより、現在の児童生徒が考えている「楽しい学校、学級」の姿が明らかになった。児童生徒が「楽しみにしている時間や場面」の多くが、友達やクラスメイト等、人との関わりと大きく関係している。学校生活において、様々な人と関わり合いながら、学び、成長することを求めていることがわかった。また、児童生徒の価値観は、学年進むにつれてより多様化し、児童生徒と教職員との認識のずれが生じていることもわかった。

児童生徒のニーズがたくさんある中で、全てに対応することや、これをやればみんなが楽しくなるという決まった方策はない。ずれが生じることが当たり前のことと捉え、日々の児童生徒との対話やお互いを認め合うことを通して、児童生徒の思いや考えを理解していくことが大切である。また、価値観の多様化に伴い、多様な学びの場や居場所の確保が課題になってくる。教職員一人に対応するのではなく、チームとして取り組んでいかなければならない。そのために、今年度の実態調査分析内容を生かして、楽しい学校、学級をつくるために、各学校で実践できることについてさらに検討していく必要がある。

### 【研究組織】

○通年講師	千葉大学教育学部	教授 磯邊 聡		
○研究協力員	千葉市立幕張小学校	教諭 郡司 恭大	千葉市立作新小学校	教諭 松田 英里
	千葉市立西の谷小学校	教諭 立花 昌義	千葉市立生浜中学校	教諭 櫛田 准
	千葉市立千草台中学校	教諭 今井 光次郎	千葉市立緑が丘中学校	教諭 高宮 健輔
	千葉市立幸町第二中学校	教諭 渡邊 顕子	千葉市立土気南中学校	教諭 五十嵐 美帆
○所内担当	教育相談班 村瀬 方彬 (担当)	小林 輝	比良 亜希子	辻元 進 森 千恵

### 【主な引用/参考文献等】

- ・文部科学省(2024)「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」  
[https://www.mext.go.jp/content/20241031-mxt\\_jidou02-100002753\\_1\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20241031-mxt_jidou02-100002753_1_2.pdf) (2025. 2. 14 参照)
- ・文部科学省委託調査(2024)「不登校の要因分析に関する調査研究報告書」  
[https://www.mext.go.jp/content/20240322-mxt\\_jidou02-000028870\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20240322-mxt_jidou02-000028870_02.pdf) (2025. 2. 14 参照)

千葉市教育センター 研究紀要第33号

○研究名：教育相談に関する研究 ○研究対象：小・中・中等教育・特別支援学校 ○研究領域：教育相談  
○研究内容キーワード：楽しい学校・学級、認識のずれ、居場所づくり、教職員の在り方